オージュボン傳と加茂市のオージュボン祭

Audubon's Biography and Audubon Festival
at Kamo-City, Niigata.

成 澤 多美也

Tamiya Narusawa

I Audubon の誕生

John James Audubon (日本ではオージュボンと呼びならされているが、アメリカ人にはオーダボンといわないと通じない。New Standard Dictionary of the English Language にも〔Ó:dabon〕と訓ませている) が死んだのは、1851年1月27日で、アメリカでは1951年盛な百年祭が催された。日本ではあまり有名でないためか当時少しもさわがれなかつた。私達は日本の片田舎の加茂で、ささやかながら百年祭を催し、彼の霊を慰めると共に鳥類愛護の彼の精神を伝え、それ以後毎年1月には Audubon 祭を催している。

ところで、彼の昇天した日は、どの本を見ても1日の狂いもないのに、彼の生れた日、場所、おどろいたことには彼を産んだ父母ですら確然とわかつていない。彼が有名であるだけに、このことが今もつて話題に上り、研究の対照になつて諸説紛々定まるところがない。

生れた日についていうならば、Encyclopedia Britannica では1781年となつていますが、1937年 Macmillan 社出版の Octavo 版 The Birds of America によると、1785年4月26日。又確たる証拠を掴んだというので一部の信用を博している Francis Hobart Herrick 教授は1785年4月22日としている。

生れた場所も Haiti 島であつたり、Aux Cayo であつたり、Louisiana の Marigny 農園等とされている。

Audubon の父とされている人はフランス人 Howbeit Audubon で、船長であつたため、普通 Captain Audubon と呼ばれているが、船乗だけに、大西洋を湖と心得、広く海外貿易にあたつていた。Santo Domingo (今の

Haiti島)で、混血児の Rabin 夫人との間に二児をあけた。兄を Fougère, 妹を Muguet と呼んだが、此の島に暴動が起きて夫人は不慮の死を遂げ、身辺急を告げるに及んで、Captain Audubon は二児を連れて彼の生地であるフランスの Nantes の町に逃げ帰つた。その男の子が J. J. Audubon であるというのが Herrick 教授の説である。

Captain Audubon と Rabin 夫人との間に男女の子供のあつたことは認めても、それがそのまま大きくなり J. J. Audubon になつたかどうかということについては、賛成できないというのが一方の説で、この人達はむしろフランス革命で断頭台上の露と消えたブルボン王朝のルイ16世とマリイ・アントアネットとの間に出来た皇儲であると確信しているのである。この皇儲説をとる人達ではそれ相当な理由があり“証明されない判断”として Herrick 教授の説に耳を傾けようとしない。

Audubon は常に“自分のほんとの名、生れた日と所とを人々に告げてはならないと父からかたく禁じられている”と洩らしていたが、これがそもそも紛糾の原因をなしているのである。ところが彼の妻 Lucy は英国生れのしつかりした婦人で確証がない限り物事を易々と信じないたちであつたが、その妻が終世夫をブルボン王朝の血統であることを信じていたことや、Herrick 教授の発見した古文書なるものに、妹の Muguet の母はフル・ネームで登録されているにかかわらず、J. J. Audubon の方は、父 Captain Audubon の名が記されているだけで、何故か母の名は記されていなかったこと、或はまた、彼の後年の精緻をきわめた野鳥図譜や観察記に見られるように異状な才能をもつていながら9才以前のことは全く覚えていないということなどが皇儲説を固執する人達にとつて又とない有利な論拠となつていたのである。

彼の生れた頃は、猜疑と流言蜚語と虐殺に終始した狂気のようなフランス革命がゴツタ返えして居り、彼が此の世に芽を出す時の濃霧であつたことが謎を深からしめる基点をなすものである。此の混沌の中に、王と王妃の衰史は地球の存在と共に永く伝わることであろうが、皇儲の行方は杳として判らない。一説には15才で夭折したとも云われるが、それとて確たる証拠があるわけではない。

当時 Captain Audubon の住んでいる地方は、王党派の勢力の強いとこ

ろで、多分王党派から依頼されて、同年輩の (Rabin との間に出来た子供と皇儲は僅に二週間の年令差であつたという) 彼の実子とすりかえたのであらうというのが、皇儲説を支持する人達のがんとして譲らない点である。

それを裏付けるために容貌や性質をもち出している。Captain Audubon は漁師の子で、沢山の兄弟の中に育ち、アグラ鼻、赭顔、脊も低く、いたつて風彩の上がらない人であつた。J. J. Audubon は此と反対にいかにも高貴の生れであることを思わせる風格を具え、またマリイ・アントアネットが生前皇儲の事について語つていた相貌と符諱するところが多く、違いと云えば、単に眼の色だけであつたこと。更に J. J. Audubon には二人の息子があつたが、何れも Captain Audubon には似ず、やはりさるやんごとなき血筋をひいたのではないかと思わしめるものがあつた。彼が器用であつたのもルイ 16 世が、錠前造りという一国の帝王としてはまことに似合わしからぬ趣味の遺伝であらうと。

Herrick 教授が古文書から発見した簡単な実証なるものに比較すると、皇儲説を執る人達の方が、いいがかりを豊富に持つている点で、ともすると勝目が多いようである。いづれにしてもこれを証明する人達が既に時の大海の中に消えてしまつたこととて、何れを正確とすることも出来ないし、彼が後年雌名をはせるようになってから、彼の敵方が、彼を攻撃して云つた“Audubon は何処にも生れなかつた”というような事にもなるが、此の謎は今後も永く論駁が繰り返されることであらう。

II Audubon の渡米

フランスで、彼は継母の手で育てられた。此の継母は実母以上に優しい人で、留守勝な夫にかわつて愛情を傾けて育ててくれた。そのやさしい母の愛の中に、彼は若草のように伸びていつた。彼の最も好んだのは、花や昆虫、石や鳥であつた。彼の小供部屋は此の青空学校から学びとつて来た教材でギッシリ詰められ、さながら小供博物館の観があつた。

Captain Audubon は自分の商売柄、彼を船乗りか、或は機械技師にする積りであつた。彼を Rochefort 兵学校に入れたのもそうした念願からであつたが、其処で課せられる物理、数学、用器画は藁を嚙まされるよりつらいものであつた。居堪らなくなつて寄宿舎から脱走を企てて失敗し連れ戻さ

れたが、父は彼を世界中で最も下手な船乗りにするよりは、彼の好む絵画でも学ばせようと、当時その道では有名な巴里の Jacques Louis David の経営する絵画学校に入学させた。しかしそこで教える絵画はおよそ生硬なものばかりで、彼の好きな鳥の美しさや、びちびちした生命の躍動等みじんもなかった。あきたらない彼は僅か2年にして此の学校を見捨ててしまった。彼は籠を離れた小鳥のように再び青空学校に自由な翼を伸ばすことができた。Captain Audubon は、此のような生活を俸に送らせて一生を台無しにしてはという不安と、もう一つは、アメリカに買い求めて置いた広大な農場の管理も人まかせでは心もとなかつたので、1803年彼が 17 才の時単身アメリカに渡航させてしまった。その時の名前は Jean Jacques La Forêt Audubon とフランス流によばれていた。

彼の落ちついたフィラデルヒヤの近郊 Mill Grove は彼にとって、何の制肘もない別天地であつた。彼の部屋はまた Nantes にあつたときと同じように卵や巢や苔でぎつしりつまつてしまった。

此处で彼は永年思いわずらつていた野鳥描写の手法を夢で見ることができた。彼は多種類の針金を求めて、裏の川で捕つて来たカワセミにそれを刺し込んで針金を曲げてみた。すると死んだカワセミは彼の思うような姿態をして生きていと同じ調子を出してくれた。肉も骨も内臓も羽根の色も変質した剝製標本とは凡そ別種なものであつた。それをモデルにして描いたカワセミは今までのどの鳥の絵よりも真にせまつていた。彼が後年 The Birds of America 或は Viviparous Quadrupeds of North America に描いた鳥や獣にもこの手法をとつたことは彩色する場合油絵具を用いず、主として水彩とパステルによつたことと共に一つの特色としてあけられている。

彼は此处で、たまたま隣に引越して来た英国系の Bakewell 家と知り合い、その長女 Lucy と想思の仲になり、結婚のゆるしを得るためフランスの父の許へ歸つた。丁度その頃ナポレオンが欧州席捲の野望をいだいてフランスの青年を戦場に駆り出そうと企んでいた。父は年頃の自分の息子の身を慮かつて、Ferdinand Rozier という手固い青年を一人雇つてアメリカへ共に歸すことにした。その時旅券に書かれた偽名が John James Audubon で、その後ずつと此の名前が用いられるようになった。

彼が St. Nazaire を出帆してから、海賊船に追い廻されたりして紐育に

着いたのは 44 日目であつた。かくて Bakewell 氏の許しを受け 1808 年 4 月 5 日 Lucy と結婚することができたのは、彼が 23 才 Lucy が 21 才の時である。しかし此の二人の樂しかるべき航海は海賊に追いかけられた以上多難な風波が前途に待つていたのである。翌 1809 年長男 Victor Gifford 1812 年次男の John Woodhouse をあけ、外に女兒も生れたが、Henderson で幼死した。此の二人の息子は後世父のよき助手として共に調査や描写にはけみ立派な図版の出版をすることができた。

III Audubon の事業

彼は小売商人でもあり事業家でもあつた。しかし彼ほど失敗の連続をやつた者は世にも珍しいであろう。

結婚前相談相手 Rozier 青年と經營した鉛鋅山は美事失敗して親譲りの財産も殆どつかいつくしてしまつた。

その後 Lucy の伯父の商事会社で見習奉公をしたが商才については無能振りを遺憾なく發揮して、ていよくことわられてしまつた。

1807 年 Rozier 青年と Louisville でキャラコ、茶、砂糖、弾藥の小売商を営んだが、此の部落が田舎であるのと、彼が小鳥の研究に没頭するため利益は少しもあがらなかつた。

1810 年此処の店をたたんで Ohio 河の川下、Henderson に移つて同じ小売商を営んだ。競争相手が少いから儲かるだろうという目算ともう一つは新しい鳥が見つかるかも知れないという二つの理由で。しかし此の村は当時二百戸足らずの僻すうの土地であつたため、売れるものとしては、少量の弾藥、羊毛製品、ウィスキー位のものであつた。

その年の冬 St. Genevieve に移つた。その町では商売も不振であつたが、町自体を余り好きでなかつたので、1811 年 Rozier と財産を分配して別れることになつた。妻のいる Henderson まで 165 哩の道を歩いて歸つた。

Henderson では若い書記 John Pope を雇い入れたが、彼と同趣味であり話がよくあうので、店を閉じるとお互の鳥の觀察談に花を咲かせていた。Pope はよく店の管理をしてくれたので、利益もあがり相当な暮しをすることができ、もともと派手好きな彼は家具調度も万端揃えることが出来た。ここでは土地の売買を覚え、安く手に入れ高く売りつけた。そうした生活が 3

～4年続くうちに足を抜くことの出来ない程深入りしていた。丁度その頃パニックが全米を吹きまくり銀行の破産が相ついで起きた。彼の土地売買業にも大きな手違がはじまり出した。

その前 New Orleans で Lucy の兄弟と協同出資でやつていた商会も此のパニックのあをりを食つて脆くも倒産してしまつた。

此の失敗をとり戻すために、製粉工場と製材工場を兼ねた工場をはじめたが、金を産み出すべき工場は、彼の金や Lucy の財産をどん欲に吸いこんでしまつた。工場には彼の描いた鳥の絵が淋しく貼られていた。

頽勢挽回を期し、造船業を始めたが、買手は不渡手形を出して、その船を運転してミシシッピ河を下航してしまつた。此の悪らつな買手と大立ちまわりを演じ、相手をヒロで刺し、彼も棍棒でぶんなぐられてこん倒してしまつた。裁判所に呼び出されて“相手方に致命的な負傷をさせた人殺し一步手前の不埒者”ときめつけられた。

一方製材所と製粉工場の債権者が、彼に支払を請求してきたが、無一文の彼はたまりかねて Louisville に夜逃げした。債権者は彼を捉えて投獄してしまつた。支払能力がないので、結局破産の宣告を受けて辛うじて出獄したが、その時彼の手許に残つたものとしては、妻子と猟銃、衣服と描きためた鳥の絵だけであつた。流石に此の時ばかりは鳥のことを考える気持が湧かないほどであつた。

IV The Birds of America 其他の出版

彼が鳥の絵を描いていたのは、全く彼の趣味からで、自然の美に打たれて、それをもつと身近なものにしたいという内的欲求によるものであつて出版しよう等という野望はなかつた。ほんとに野鳥の絵を出版してみようという気になつたのは、1820年というから 35 才の時で妻もこれには非常に乗り気になつた。

1822年長男の Victor を連れて費府に向つて出発した。勿論大した旅費は持つていなかつた。川蒸気に乗つたり歩いたりして Shippingport に着いたときは懐中僅に 13 ドルしかなかつたという。一冬ここで過して、肖像画や風景画、果ては内部装飾と、金になることなら何でもやらねばならない程貧しかつた。翌年費府に出て有名な芸術家や科学者に遇うことができた。Th-

omas Sulley という当時一流の画家も彼を好遇し、何くれと世話を焼き油絵や絵画一般について助言してくれた。ナポレオンの甥 Charles Lucien Bonaparte は特別な親切を示してくれ、彼を Academy of Natural Sciences に紹介してくれもした。彼の絵は Academy に陳列され非常な賞讃を博したが、それにもかかわらずこれを彫刻して出版しようとする業者はなかつた。それに尙悪いことには織物師の陰気な鳥類研究家 Alexander Wilson との腐れ縁が一つの暗礁を作つていた。というのは Wilson の鳥類の本の刊行に当つて、一部は自らもその記載を手伝つていた George Ord が Audubon の本が世の中に出ては、彼等の仕事に蹉跌を来す惧れがあつたからである。批難の手初に植物を配した鳥の絵に対して猛烈な攻撃をした。

それやこれやで費府で出版するのぞみは全く水泡に帰してしまつた。彼は費府を断念して New York に出た。しかしここでも出版は思いもよらなかつた。友人達は旧大陸に行くことをしきりにすすめた。彼も英国へ行く方が得策でないかと思つた。

一応彼は妻のいる Bayousara に帰えつて、ダンスや絵画や音楽を教え相当な弟子を得た。肖像画もかいた。出来るだけ儉約して旅費をたくわえることにした。かくて 1826 年の春までに 400 以上の鳥の絵を描き、一年ほどかかつて 1,500 ドルを稼いだ。かくて 4 月半ばに Liverpool 行きの便船に乗ることができた。

新大陸の珍しい鳥類、それに植物や昆虫を配しただけでも充分人をひきつけるに足りるのであるが、彼の新しい手法や、鮮明な色彩、大胆な構図は芸術的な感覚の深い人達を動かさずにおかなかつた。Liverpool の王立研究所で展覽されると果然大きな反響をまき起した。牛津大学、劍橋大学でも手厚く歓迎され牛津大学図書館或は Liverpool 図書館などは、出版したら購入しようと公式に予約してくれた。London でも彼の名は既によく知られていた。殊に当時社交界でも、画壇でも有名な Thomas Lawrence 卿の知遇をうけた。このために絵は高い価格で売れた。

Edinburg で W.H. Lizars という当時の彫刻師間では一流の人物にあつることができた。Lizars は Audubon の絵を見て打たれると共に即時彫刻をひきうけてくれた。1826年には、彼の最も傑作と信じていた雄の七面鳥が届けられた。大きさも彼が注文していたように Doubl Elephant Folio (27

×40吋)の大版であつた。此は当時の出版物としては最大のものであつた。しかし不幸にも Lizars の図版工がストライキを起して僅に 10 図版を作っただけで中止せざるを得なかつた。

その後 Robert Havell を発見したのであるが、此の人はまだ若く、社会的にも余り知られていなかった。しかし腕はたしかで Lizars に匹敵するものがあつた。かくて 1827 年の終までに 5 部 25 図版を仕上げた。此の人は息子と共同でやつていたが惜しくも 1830 年に他界しその後息子が独力でやることになつた。

Audubon は彼の絵を一部 5 図版にして次々と予約者に渡すことにしていた。最初 300 部の予約者をとる積りであつたが実際は 279 人の名を得た。もつとも 1838 年までに実際残つたのは 125 人とも 161 人ともいわれている。当時 1 部 (5 図版) 2 ギニー、全巻 87 部 435 図版で価格にすると、182 ポンド、14 シリングであつた。

1837 年米国をおそつた大恐慌は彼の予約の上にも大きな影響を与えずにはおかなかつた。市中には 1 ドルの銀貨も見出せない程であつた。そんなためにアメリカで得た予約者もどんどん手をひいてしまつた。此のパニックは英国にも波及し、英国へ再度渡つた時は予約帳がすつかりしぼんでしまつたことにおどろいた。彼が Louisiana を出発してから 12 年目 1838 年 6 月 The Birds of America の最後の図版ができた。此の前後に Ornithological Biography 5 巻も完成していた。

それより以前 1829 年 5 月家族を連れて英国から米国へ戻ると The Birds of America の小型本を出す計画を熱心に進めた。母典を取捨選択して 7 巻に収め 1829~1844 年に 1,000 部発行することができた。この中には母典になかつた植物も新に加えたり 12 種の新種の鳥も入れ全部で 500 図版、テキストもつけ面目を一新した。世に Octavo 版と呼ばれているのがこれである。この小型本には Victor と John の兄弟が助力している。

Elephant Folio の方は彼の名声を高からしめるには役立つたが、金銭上の報酬は殆どなかつた。ところが此の小型本の方は低廉なため誰からも買いたわれ、そのために一家は相当な収入をあけることができた。

此等の図版は分類学的な配列ではない。また中には幼鳥と成鳥との区別を誤つて幼鳥の方を新種としたものがある。Bald Eagle の幼鳥を Washing-

ton Sea-Eagle とした如きである。Cuvier's Regulus は果してこうした鳥が実在しただろうか、或は単に彼の記憶のみによつて描かれたものでないかと云われている。しかし此の写実的な図版が出版されたために、鳥の盛衰が明になったことは特筆すべきことである。たとえば当時その数の莫大なことに於いて有名であつた Passenger Pigeon の如きは Alexander Wilson の測定によると一群 22 億 3027 万 2 千、彼自身の測定によると 11 億 1513 万 6 千という想像もつかない大群であつたが、商人によつてどんどん商品化され 19 世紀には一日に何千バーレルも市場に出荷されたためその数を減じ、1914 年僅に 1 羽残つた最後の鳥がシンシナーチ動物園で死んで名実共に絶滅してしまつた。

Great Auk の如きも食糧や羽毛を得るため濫獲され、次第にその数を減じ、1844 年 Iceland で、1848 年 Norway で、1870 年 Newfoundland で夫々一羽ずつとれていくが、その後誰の手にもとられていない。

Reddish Egret の如きも羽毛商に追い廻わされて Florida 地方からは姿を消してしまつた。Whooping Crane は Hudson 湾から Iowa にわたつて広く分布していたが、今僅に 20 羽ぐらいしか残つていないといわれている。同じような運命にあるものに Prairie Chicken, Ivory-Billed Woodpecker (これは最近また発見されたといわれている) 或は Carolina Paroquet 等がある。

また当時その数が少かつた Meadow Lark の如きは、今全米何処へ行つても見る事が出来るようになった。一時絶滅しかけたため Audubon 協会が特別な保護をして遂次その数を増加しつつある Great White-Heron, Laughing Gull, Roseate Spoonbill 等がある。

この様に鳥の消息がよくわかる点に大きな貢献をしたばかりでなく、鳥に対する認識、鳥を愛する気持を一般の人達に植えつけた点に於ては實にはかり知れない大きな貢献といふことができる。

小型本の刊行が順調にすゝむのをみて、この監督を John に委せ 1843 年に新しい計画をすすめていた。それは哺乳動物の図鑑を出すことであつた。晩年彼は New York に 30 エーカーの土地を買つて Minnie's Land と呼び息子夫妻孫と共に楽しい家族生活を営んだが、その居心地のよい住居で、熱心に哺乳動物を研究していた。友人にそれ等の標本の送付を依頼し、殊に親

友 Bachman には遠慮なく頼んでやつたし、自分もミズーリ河を遡上して調査にあたつた。

これ等の動物は、彼が永年鳥で苦心した技術と観察眼を遺憾なく発揮し、1日に14時間も粘ばつた。この図鑑には、彼の技を遙に越したと云われる息子達が助力し、またその精細な記載は Bachman がやつてくれた。その頃は Bachman は Victor や John にすれば義父になつていた。従つて此の本は Audubon 全家族の共同作品であるといふことができる。此の動物の本が有名な Viviparous Quadrupeds of North America であるが、完成を見るに至らずして“林人” J.J. Audubon は永眠してしまつた。

しかし、水彩とパステルで描かれた躍動的な——余りに劇的だとも云われる鳥や獸類の鮮明な描写は彼の性格そのままのように、今でも見る人をして魅了せずにはおかない。

謎の霧の中に生れた彼、狂暴なフランス革命の渦の中に巻きこまれなかつた彼、ナポレオンの野望の踏み台にならなかつた彼は、かくて静な束縛のない自由な青空の中で、若竹のように伸び、死んではその愛の地下莖が、広く世界の隅々にまで伸びんとしている。

V 晩年及び死後の榮譽

精緻な躍動的なそして色彩に富んだ鳥の描写は、新大陸ではもて囃されなかつたが、ひとたび英国に渡ると俄然人々の注目の的になり、学会でも高く評価するようになった。彼の図版には John J. Audubon 或は J.J. Audubon と署名してあるが、記名のあとに F.R.S. 或は F.L.S. また M.W.S. 等のアブリビエーションがある。

F.R.S. 或は F.R.S.'s. L & E 或は F.R.S.E. は王立科学協会々員 Fellow of the Royal Societies London & Edinburg の略。

F.L.S. は有名なリニウス会員で Fellow of the Linnean & Zoological Societies of London.

A.A.A.S. はアメリカ科学芸術協会の略で American Academy of Arts and Sciences. Edward Everett に推されたものである。

此の外巴里の博物学会の会員 Member of the Natural History Society of Paris に推され、紐育のリシウム学会の会員 Member of the Ly-

ceum of New York 等多数著名な学会の会員に推されるに至つた。

これ等のうち彼の最も名誉としたのは王室学会の会員とリニウス学会で受けた会員名で F.R.S. F.L.S. を特に好んで用いたのでも知られる。

彼の死後の人気がまた大したものである。彼の名を冠した地名、建造物、鳥の名、団体、雑誌、等枚挙に遑ない程である。

晩年彼は一家と共に New York に暮し、そこで逝去したが New York 大学では、彼の功績をたたえて 1900 年大学構内にある“名誉の殿堂”に彼の名を連ね、1901年に至つて植物学者 Asa Gray と共に肖像画をかかけられる光栄に浴した。こえて 1927 年 A. Stirling Calder が彫刻した彼の胸像が同じ殿堂で除幕されるに至つた。

彼の名に因んでつけた Audubon Mountain というのが Denver 市北方 40 哩 Colorado 山系にある。標高は 13,223 呎でミズーリ河水系の水源にそびえているそれである。彼が晩年哺乳類の研究のために此の水系を遡上したことは有名である。後日植物採取家 C.C. Parry という人が 1862 年此の山の標高を測定するために登山し、Audubon の生前の努力をたたえて命名したといわれている。しかも此の山に住んでいる二種の鳥も彼の名を冠している。ウグイス科の Audubon Warbler, もう一つはツグミ科の Audubon's Hermit-thrush である。

Henderson の町は彼とは因縁浅からぬものがある。苦難の時代最も永く住み、Victor と John の二児もここで生れた。娘も亦ここで生れ、ここで幼くして死んだ。あらゆる事業に失敗して獄舎にまでつながれた。彼の最愛の妻 Lucy は Audubon の死後ここに移り住み、ここで死んだという。彼としては悲しいがしかしなつかしい思い出の土地である。従つてここでは彼の名を冠したところが多い。街の名で Audubon Street. 教会に Audubon Church, 学校も Audubon School というのがある。公園では彼の名をつけたものが三つもある。Audubon Mill Park, Kentucky 州立の Audubon Memorial Park, もう一つは 500 エーカー程ある森林で Audubon Park というのがあるが、此の公園の中には Audubon 博物館がある。彼の生涯の事蹟を全部集結したところで、古風なフランス風に建てられているのは、彼がフランス系であつたためである。

此の公園の附近には龐大な経費で作られたという Audubon Memorial

Bridge がある。また此の町には彼の名を冠したコーヒー、油、更に氷や石炭に何の関係があつたのか矢張り彼の名前がつけてある。

野鳥研究雑誌 Bird Lore が Audubon Magazine と改称された。その後ずつと継続され、1954年で 56 巻を発行し益々盛大をきわめている。これを発行する協会は Audubon Society であるが、Audubon Magazine 以外に数種の定期雑誌が発行されている。単に雑誌発行だけでなく野外研究活動が非常に活潑で Audubon Nature Camp をもち青少年は勿論成人のためにも毎シーズン探鳥、植物、昆虫採取等が催されている。

Audubon よりももつと文化的に偉大な功績をあけた人があつた。しかし Audubon 程アメリカ人の人気を博している人は他に例を見ない。何故なのであろう。

彼がともするとブルボン王朝の皇儲であつたかもしれないためであろうか。あらゆる事業に失敗したことが今もつて人の同情を惹いているのであろうか。あらゆる人と快よく交わつた温い心の持主のせい、或は著書や絵がすばぬけて魅力的なためとも考えられる。おそらくその全部が人の心を捉えているのであろうがそれにもましてわれわれの看過できないことは、よるべない野鳥を心から愛したその温い気持である。それは異邦人である私達の気持さえもゆすぶらずにはおかぬ。少年時代から金にもならない野鳥をしかも貧窮のドン底にあつても尙且つ追い廻わし晩年に至るまでとどまるところを知らなかつたその熱情こそは誰の心をも動かすものである。

VI 加茂の Audubon 祭

野鳥を語るには私達同様貧乏な Audubon を知り、少しでも Audubon の精神を伝えたいという気持に駆られる。早い話がアメリカの野鳥愛好熱も煎じつめると彼の及ぼした影響が大きな光茫を曳いているのである。

1951年は彼の百年忌であつた。夏ではあつたが、私達は彼の百年祭をささやかに町の図書館で催した。集まつたのは僅に 2~30名であつた。次の年は 1月 27 日で此の時は 60 名であつた。第 3 回目は 1月 27 日の命日が普通の曜日だつたので 1月 31 日に催し 200 名の参会者であつた。今年は第 4 回目を 1月 24 日に催し 350 名が集まつた。

出来るだけ肖像画を集める事に努力し、図書或は雑誌にのせられた彼の肖

像は洩らさず蒐集し、私の学校の須藤教諭、田中画伯等に依頼したり、私自身幾晩もかかつて描き上げたのが写真に見るような彼の肖像である。右から左の順で示すと、

- 1) Audubon の胸像。New York 大学の“聖なる殿堂”に安置されているもの。
- 2) Cruickshank の筆によるもの。1937年 Macmillan 会社発行の Audubon's Birds of America 所掲
- 3) 1824年彼が 39 才の折 Mississippi 河下流の探鳥後 Louisiana を訪れた際の自画像。油絵であることも有名である。
- 4) 次子 John Woodhouse が 1841 年に描いたもので American Museum of Natural History 所蔵のもの。原画はこの外に愛犬、乗馬が配してある。
- 5) Henry Inman 筆。American Engraving Society で出版した The Birds of America の口絵所掲。
- 9) 1848年頃 Brady という人が初めてとつた銀板写真で、最もよく彼の相貌を伝えたものである。

祭壇には此の肖像画をかかけ両側に花瓶がおかれる。一つは加茂中学のものが野鳥愛護に立派な成績をあげたということで 1951 年農林大臣から贈られたものである。もう一つは私の学校が全国十校の一つに選ばれ、これまた農林大臣から表彰された名誉あるもので日本でさえあまり知られていない私達の小さな町に二つも大臣賞が来ているところは珍しいことである。これも Audubon のおかけであると思つている。

彼は小鳥とともに植物も愛した。それで此の花瓶には彼を慰めるために美しい温室咲きの花を挿すことにしている。

彼は酒がきらいであつた。だからきつとお菓子が好きだつたに違いないということで、真中にはお菓子を供える。煙草を Indian から習い覚えて親友の Bachman にもすすめる程好きだつたので煙草を供えることにしている。

此の日は特に舞踊を催すことにしている。二つの小学校の女生徒がやつてくれるのであるが、子供好きであつた Audubon も嚙悦んでくれることであろう。

その外 Audubon の話、野鳥の話、或いは映画を写したりする。

寒い北国の此の町では、1 月末といえば雪がさんさんと降っているが会場の中は温い雰囲気にもまれ集まつて来た青少年少女は等しく頬を真赤に火照らせて此の祭を楽しむ。

Audubon への思慕、野鳥を愛する気持は、国と時代と言葉こそ違え、必ずや Audubon の心に通ずるものがあるにちがいない——と私は思っている。

(1954年4月22日 筆者は新潟県立加茂農林高等学校教諭)

国立自然教育園について

The National Garden for Nature Study and its History

鶴 田 総一郎

Sōichirō Tsuruta

今から約 550 年前、南朝の雑色柳下上総之助が一族を伴つて武蔵野に下り、その原始林の一角に居を定めたのが国立自然教育園のそもそものおこりである。周辺に延々一里の大土塁を築き、その上に椎を植え、さらに二重三重の土塁の内囲いをつくつてその中に居住したらしい。このため白金長者と呼ばれた。これが江戸のはじめに四国高松の藩主松平讃岐守の下屋敷となり、明治年間中は陸海軍の火薬庫及び衣料廠になつていたが、その廃止とともに大正 6 年当時の宮内省に献上されて白金御料地と改まり、この終戦まで続いていたのである。

この荒筋の歴史でもわかる通り、本園はほとんど人工の加わらない中世の武蔵野の大自然林の面影をそのままとめている。また地形の変化に富み、台地、谷地、沼、沢、池、湧水が交錯して複雑な様相を呈し、あらゆる形態の自然環境に恵まれているといつても過言ではない。従つて生物相も豊かで高等植物（羊歯植物以上）約 1,000 種、昆虫約 5,000 種が発見され、野生鳥類

3

2

1

6

5

4

オーギュボンの肖像 (本文70頁説明参照)

野鳥愛護の功によつてうけた農林大臣賞。右が加茂中学校のもの、左が加茂農林高等学校のもの（本文70頁参照）

加茂市の第二回オージュボン祭, 1952 年 1 月 27 日（本文69頁参照）